

2008年(平成20年)
9月28日(日曜日)
東京新聞より

時代を読む

渡辺 利夫



北京五輪のあの喧嘩が終わ
って秋も深まり、清澄な空気
が漂い始めた。

しかし武力鎮圧後のチベッ
ト、大地震による四川省の阿
鼻叫喚は今どうなっているの
だろうか。五輪開幕式を前に
して雲南省昆明でバス連続爆
破事件があり、新疆ウイグル
自治区カシユガルで武装警察
に対する爆破テロが発生し
た。

事件発生の当地で、空前の
警戒態勢が敷かれたのはいう
までもない。五輪の開催地の
北京でも一般市民が「鳥の
巣」に近づくとができないよ
うな厳重な警備態勢をもつ

て、騒擾が北京に波及するの
を食い止めた。五輪の猛々し
い報道が終わってほっとして
いるのだが、チベットや新疆

要があるという一出版社の
提案に同意して、過日、岡崎
久彦氏と二日間にはわたり議
論を続けた。対談は「中国は

拡大しようとする躍起なのだが、
その志向性自体が無理に無理
を重ねたものであり、この無
理難題に挑んで、結局、中国
は衰退に向かわざるをえない
のではないかという見方であ
る。

中華人民共和国は、史上最
大の版図を構築した大清帝国
のそれを継承して、チベッ

歴史に「逆襲」される中国

の現在はどうなっているの
か、シャーナリズムはそんな
ことなど、まるでなかったか
のように囁りをひそめてしま
った。

歴史に逆襲される」といっ
々刺激的なタイトルでこの
十月の終わり頃には出版され
る。

こんな折だからこそ、中国
の政治や社会の「闇」を歴史
と地政の両面から読み解く必

対談の基底を流れるのはあ
る種の諦観である。要するに
中国は自らの力量の及ぶ以上

ト、新疆、モンゴルといった
異民族を抱え込み、今また台
湾を併合しようとしている。
本来であれば内部の成熟に向
けてしかるべきエネルギー

清国は、したがって中華人民
共和国の半分程度となる。清
国は、したがって中華人民
共和国の半分程度となる。清
国は、したがって中華人民

五輪開幕式直前の八月一
日、胡錦濤国家主席は「中国
が直面している矛盾とその規
模、複雑性は世界に類例のな
いものだ」といった趣旨のこ
とを述べたが、中国の抱える
上述した問題を念頭に置いて
の発言であったように私には
思えてならない。

(拓殖大学学長)